

歴史に学ぶ

第二十九回 「鬼の平蔵」はリスティングの元祖だつた！

悪人には鬼より怖かつた「鬼平」

池波正太郎原作の小説『鬼平犯科帳』は何度かテレビドラマ化されたが、中でも二代目中村吉右衛門版は最も長期間にわたり放送された人気番組だつた。番組が放送開始された一九八九年はちょうどバブル経済の絶頂期だつたが、当時の日銀総裁が連続利上げに踏み切つてバブル退治に乗り出したことから「平成の鬼平」と呼ばれたりしたものだ。

その主人公、鬼平こと長谷川平蔵（諱は宣以）は実在の人物である。平蔵が活躍したのは、松平定信が寛政の改革（一七八七～一七九三年）を推し進めていた時代だ。その少し前に天明の大飢饉が起き、飢えに苦しんだ多くの農民が村から逃散して江戸に流入した。彼らは無宿人と呼ばれ、その中には盗賊になる者も少なくなかつたという。無宿人とはホームレスの意味ではなく、当時の戸籍である宗門人別改帳に記載されていない者のこ

とで、江戸の治安悪化の原因となつていていた。

そのような時に火付盗賊改方の長官に就任したのが長谷川平蔵だつた。通常の犯罪取り締まりは江戸町奉行が行うが、特に凶悪犯摘発のため火付盗賊改方は独自の機動性と捜査権を与えられて

いた。ここで平蔵は数々の実績を挙げ、江戸市民から拍手喝さいを受けたが、盗賊からは「鬼の平蔵」、略して鬼平と恐れられたといふ。

中でも平蔵の名を高めたのが、葵小僧事件だ（一七九一年頃）。葵小僧を名乗る男が率いる一味が江戸で強盗を繰り返し、毎回、押し入った商家の子女を強姦するという凶悪極まりない手口だつた。平蔵は一味を逮捕し、正式な取り調べ手続きを行ふことなく直ちに処刑した。

本来は被害者から事情を聴くなどして裏付けを取るべきところだが、被害女性の精神的苦痛を配慮し、かつ被害女性の名前が記録に残ることを避けたのだ。平蔵の独断による措置には一部の幕閣からは批判も出たが、老中・松平定信は容認した

という。

石川島人足寄場を設立 世界初の本格的職業訓練

平蔵は凶悪犯の摘発に奔走するだけでなかつた。その頃、江戸の治安悪化に頭を悩ましていた松平定信は、無宿人対策を役人に募つた。これに応じて平蔵は、石川島に人足寄場を作ることを提案した。ここに無宿人や軽微な罪を犯した者を収容して技能を身につけさせ、出所後に生計が立てられるようにするというものだ。

当初は多くの幕閣は「小細工だ」として反対したが、定信がこれを承認し、平蔵に「人足寄場取扱」兼務を命じた。

こうして一七九〇年に設置された石川島人足寄場には数百人が収容された。ここで実施された職業訓練は大工、左官、紙書き、桶づくり、髪結いなど、女性には裁縫、機織りなど、合わせて三十五種類に及んだといふ。

入所者には、訓練作品の売上金の八割を賃金として毎月支払った（二割は施設の経費）。そのうちの三分の一は本人の貯金として積み立て、出所時に一括で渡した。このほかに、開業資金の援助や職人道具の贈与も行われている。

また月に三回、石門心学の学者を招いて講義を行つた。石門心学は神道や仏教、儒教などの教え

をもとに庶民のために平易な言葉で道徳や倫理を説く学問で、収容者の生活指導や社会復帰に役立つた。

それでも職業訓練や更生を行つた例はあつたが、石川島人足寄場のように本格的なものは初めてだ。職業訓練や更生という考え方自体、

だが実は、ある難題に直面していた。運営資金の確保だ。幕府から与えられた人足寄場予算は初年度で米五百俵・金五百両だったが、幕府財政悪化のため二年目は三百俵・三百両に削減されてしまつたのだ。

そこで平蔵は、幕府の御金蔵から三千両を借り、その資金で銅錢を買った。大量の買いが入つたことで銅錢相場は急上昇、これを見て直ちに銅錢を売つて金を買い戻し、多額の利益を出したといふ。これによつて平蔵は借りた三千両を御金蔵に返却し、差額の利益分を寄場の運営費に充当した。

もし失敗していたら、寄場の運営費どころか、御金蔵に穴をあけるリスクもあつたわけで、もしそうなれば切腹は免れないところだ。その胆力には驚かされるが、相場感覚にも優れていたと見える。

さらに寄場の空き地を材木や炭の置き場として民間業者に貸し出し、その賃料で寄場費用の一部を補つたという。経営感覚も持ち合わせていたのだ。

平蔵はこうした相場感覚や経営感覚、さらには職業訓練という新しい発想をどのようにして持つことができたのだろうか。そこには、彼の生い立ちと若い頃の経験が関係しているように思える。



経済感覚にも優れていた

ヨーロッパでもまだ存在しておらず、世界で初めてだつたのだ。さらに言えば、趣旨はやや違うものの、広い意味では最近注目されているリスクリング（学び直し）の元祖とも言える。

だが若い頃、家庭の事情から家を出て本所界隈で暴れ回つていたという。地元の無頼者と喧嘩したり遊郭に通いつめたりして、「本所の鍔」などと呼ばれていたとも伝わつてゐる。このあたりのことは『鬼平犯科帳』でも、描かれている（かなり誇張が入つてるとみられるが）。

やがて実家に戻り、父の後を継いで役人の道を歩むこととなつたわけだが、そうした経験を通じて、庶民の生活や社会の実情を深く心に刻むことになつたのだろう。葵小僧事件に際しての被害者への配慮にも、それは良く表れている。こうした経験が人足寄場の発想につながつたと考えられ、役人生活では得られない経済感覚も身に付けることができたと推測できるのである。

現在の企業経営で言えば、世情に通じる、つまり現場をよく知り理解すること、あるいは社会のニーズを把握することである。そして時にはリスクを取つて挑戦することで、新たな可能性を切り開くことも重要だ。もちろんそれに平蔵のように、正しい知識と情報が大前提であることは言うまでもない。

岡田 晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長 理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇一二年、同特別招請教授。